あの春のアネモネ

U.セチンバートル
（訳）ニリガリ／青木隆浩

私は人生で今日ほど歓喜に満たされたことはなかった。愛しい娘の語ったことばはわずか二言だけだったが、かけがえのない宝石のようだった。その宝石のような二言を聞いてから二十年が経ち、老け込んだ今日になってからやっと「それ」が見つかるとは、悔やんでも悔やみきれない。「それ」は、茶目っ気のある褐色の肌の娘が、私と互いに慣れ親しんだ後、別れ際に愛くるしい視線を少しそらしながら私にくれたノートだった。愛情の浸みこんだ文が不ぞろいに並んだノートをしばらく見るともなしに眺めていると、その文字は横書きで、私たちの縦書きの文字とは異なるので、わからなかったのが惜しまれる。しかし、この大切な贈り物をなくしてしまうなんて思いもしなかった。そして再び見つかるとは、まったく夢にも思わなかった。可愛らしいその書き手の末永き幸せを祈りたい。もしも私がおまえの書いてくれた二言を読んで理解できたら、汗の浸み込んだノートをなくしたとき、愛情のこもったおまえのことばを忘れるはずもなかった。

おまえのことは私の想念から一瞬たりとも離れたことはなかった。おまえは青い絹のスカーフを頬かぶり、風になびかせて歩く美しい娘だった。おまえが初めて青いスカーフをひらひらさせてやってくるのを見て、私は青色の旗と見まちがえてしまったほどだ。しかし、旗ではなく、風に揺れるおまえのスカーフだった。愛するおまえの二つのつぶらな黒い瞳と言ったら、房状に結んだ原色の青い絹のスカーフの下で潤み、まるで何かを物語ることができるかのようだった。その瞳は、最初に私を見たとき星のように光り輝き、そして恐怖、驚愕、困惑、苦悩といったような多くの感情を浮かべながら、私を穴の開くほど見つめたのだった。そのとき私は意識を失って氷原の中に横たわっていたのだから、おまえが恐怖におののくのも無理はなかった。おまえの青い絹のスカーフがひらひら揺れながら見えたそのとき、私は倒れ込んで横たわっていた場所から何度も身を起こした。そして、「人民公社の畜群は公有財産、私よりも価値がある」と思い、畜群を囲いに追い込むために、起き上がって慎重に歩を進めた。何度も倒れては雪を口に含み、唇から流れる血を舐めながら、力を振りしぼって歩いた。おまえが私を自分のゲルに連れて行こうと何度も頭を振り、狼狽した目つきで見つめていたのを、私はおぼろげながら覚えている。

おまえのつぶらな黒い瞳はまるで何かを物語ることができるかのようだった。そしてまた、おまえのその美しい黒い目で揺れ動く黒く濃いまつ毛と言ったら、何と長く生えてい

ることだろうか。桜桃のような黒い目の縁を飾る真っ黒なまつ毛は、まさに人の心をくすぐる美しい長いまつ毛だった。

長いまつ毛のこの娘はハルハ・モンゴルの娘だった。ハルハの娘たちは、頬がふっくらとして額が広く、モンゴル民族の特徴を完璧に保持した人びとだった。羊飼いの男である私は、吹雪で道に迷い、あなたがたの土地に入り込んでしまった。そして、おまえのような娘と慣れ親しむことができるとは、私は何という果報者だろうか。おまえは私の命を救ってくれた。家畜の群れも救ってくれた。私はあなたがたにひと月以上も迷惑をかけ、おまえの母は私を自分の息子のように、おまえの妹は自分の兄のように面倒を見てくれた。おまえは私を実の弟のように世話してくれた。そのためなのか、あるいは別の理由からなのか、いずれにしても、私はおまえに好意を寄せてしまったのだ。

私は山の頂に登り、遠くを眺めた。おまえを見つけて眺めたいと思い、おまえの姿と遠方の土地を長い間見つめて座っていると、雲は青く、山は青く、水も青く輝いて見えた。それらの青い色こそ、まさにおまえのあの揺れるスカーフだったのではなかろうか。

懐中から包みを取り出して開けて見ると、私の贈り物は青、おまえの贈り物も青、書かれた文字も鮮やかな青だった。「私はこの青い絹のスカーフで、いつかまた、おまえの豊かな黒いおさげ髪を結んであげよう」と心の中で思うと、

青い絹のスカーフを
清地堂[1]から手に入れた
心から愛する私のバドマーよ
おまえは青くたなびく雲の下のどこにいるのだろうか

というヘシグテン地方の歌が私の心を掻き乱した。そして、「青い絹のスカーフを巻いた愛しい娘よ、おまえは今、青く見える遠くの雲の下のどこにいるのだろうか」と悲嘆に暮れ、遠い彼方でかすかに青くきらめく山々の頂を眺めていると、アネモネが咲き広がるあの春がふと思い出された。

バヤン・ハイルハン山の南斜面の春営地に宿営していたあの晩、天候は穏やかで暖かかった。湿気を帯びると息を吹き返す谷原のヨモギの中で群れ、雪解け水を吸っていた羊は、気持ちよく腹を満たし、子羊は真新しい寝所ですくすくと成長し、穏やかに寝ていた。おまえは夜まだ濡れてべとべとする子羊を仕分けながら、「あなたの群れの母羊が子を産んだ」と言って、子羊をかまどの左手に置いた。すると、おまえの母親が「最初に生まれた子羊だよ」と喜びながら、子羊の白斑のある額に油を塗って祝福した。そしてこの日から子羊の出産が始まった。私の群れの出産が終わると、おまえの群れの出産も始まり、私たち

[1] 当時のヘシグテン旗の有名な店の名前。

四人は落ちた帽子を拾う暇もなく働きはじめたが、そのときは疲れも感じなかった。私はたまに故郷を思い出すこともあったが、悲しみ嘆くこともなく、よい春を過ごし、子羊の生育のノルマも達成した。

強風が吹きすさび、ゲルの屋根と梁をがたがたと揺らしたあの晩、私たちは眠りにつき、母が家畜の見張り番をしていた。妹とおまえの二人はいっしょの枕で寝ていた。私は故郷を思い、母を思い、また自分の婚約者をおまえと比べながら思い出していたので、なかなか寝つけなかった。私の婚約者は、おまえと比べると、本当に恥ずかしがり屋の娘だった。私はその娘と会うために、仲人について家まで行ったが、会ったのはその一度きりだった。その娘の家の人たちは、用事とか何かを口実にして、みな外出していた。家には私たち二人だけが取り残された。そして私は思った。「このそばにいる娘を生涯の伴侶にするわけだ」と。そして、娘の顔色をうかがいながらちらっと見ると、その娘は急に恥ずかしがり、ふっくらとした頬を赤く染めて、私の茶碗にお茶を注ぐと、すぐに出て行ってしまった。「ああ、可愛らしくて器量のよい娘だな。でも、私のことなど眼中にもないようだ」と思うと悲しくなり、氷を飲み込んだような暗澹たる気分になった。その後、何度か使者を送り、最終的に何とか許諾の返事をもらった。こうして私たち二人は婚約したので、本当のことを言えば、その娘と慣れ親しんだ経験はとうていおまえとの経験には及ばない。婚約した後で互いに愛し合わなければならない、そんな星のもとに生まれたのが私たち二人なのだ。何という不幸だろうか。家畜の群れの端で慣れ親しみ、夜の家畜の見張り番をいっしょにつとめるこの家の姉と私のようだったならば、何と素晴らしいことであろうか。そんな風に後悔の念とともに思いにふけっていると、向こうの寝台で規則正しい寝息をたてながら穏やかに眠っているおまえが、私の粗野な心を支配し、私の心の隙間を侵しはじめた。するとそのとき、母親があかりを点けて家畜の見張り番に出かけた。私は身を起こし、勇気を出しておまえのことを観察した。

長いまつ毛を揺らし、時おり笑くぼを浮かべながら眠っているおまえの顔は、柔和で微笑ましくもあった。私がもの欲しそうに見つめていると、「こっちにきて寝たら」と呟くので、唇を固く閉じて舐め、掛布団を蹴飛ばし、胸をはだけておまえの寝床にもぐり込んだ。袖なしの胴着の胸元が大きく盛り上がり、丸い茸のように隆起した二つの柔らかな乳房の形状が露わになっていた。このまま胴着を剥いでゆけば、乳房だけでなく、細い真っ白な腹や幅の広い腰も現れてくるのではないかと思うと、私の欲望はますます激しくなっていった。おまえの柔らかい白い手、ふくよかな二の腕、その中でもとりわけ柔らかい秘められた二つの盛り上がった乳房が、体を覆った胴着からはっきりと見え、呼吸するたびに上下に揺れるのを見ていると、肉体と精神の均衡が失われ、欲望に襲われるかのようになる。ふと気がつくと、私たち二人の間に寝ていた妹の上から、私はすでに身を起こしてお

まえの手を握っていたのだった。おまえはびっくりして目を覚ますと、すぐに自分の手を引っ込めて、

「お母さんは……」と低い声を上げた。

「お母さんは見張り番に……」

「さっき出かけたの？」

「そうだよ」と言って、私がまたおまえの手を握ると、おまえは少し微笑み、手を引っ込めずにそのままにしてくれた。

その瞬間、男の敏感な部分を刺激するような、おまえの穏やかで愛くるしい仕草に私は酔いしれ、勇気を振り起こし、おまえの手を思わず強く握りしめ、「こっちにこいよ」と言った。すると、おまえは清らかな美しい大きな目で、男の肉体に隠された火が燃え上がるほど見つめ、体の向きを変えながら妹の方に近づいてきたので、私の肉体の器官は敏感に反応した。私は乱れた息を押し殺し、おまえの豊かな黒いおさげ髪を撫でながら、「姉さん、アルタイマー姉さん、こっちにきてくれ」と、低いがはっきりとした声で囁くと、おまえは掛布団で体を覆って身を起こし、「ヒャンガン、ヒャンガンジャブ、あんたがこっちにきてよ」と言って、赤くほてった顔を隠した。

私はおまえのすぐ横に近づくことはできなかったが、おまえの懐に手を差し込んで乳房をまさぐっていた。何と柔らかくむっちりとした乳房だろうか。おまえの左の乳首をつまみ、激しく愛撫していると、おまえの心臓はどきどきと驚くほど強く鼓動していた。その下の方に手を滑らせ、すべすべした白い腹の上に若々しい力のみなぎる手を這わせると、おまえは急いで私の手を掴み、手の甲を爪で軽く引っ掻いていたのは、いったいどんな意味があったのか私にはわからなかった。すぐさまおまえを抱きしめて接吻を始めると、おまえも私の唇を何度も貪るように吸い、全身を激しく痙攣させた。その後どうなったのかわからず、わたしは半ば意識を失ってしまった。しかし独特な幸福感に包まれていた。痺れるような感覚が過ぎ去り、再び肉欲に目覚め、花のつぼみのようなおまえの閉じた赤い唇に思う存分接吻しようとしていると、外から足音が聞こえた。私たち二人はすぐに体を反転させて自分の寝床に転がり込み、寝たふりをして横たわっていた。そして母親が入ってくると、みな側壁の方を向いていびきをかいて寝ていたのだった。

翌朝は風もなく、雲もなく、夜中に降った雨が地面を濡らし、大気は清浄そのものだった。私が昼間、子家畜の世話をする牧民のように袋を背負い、羊群の端にいるおまえのところに行くと、バヤン・ハイルハン山の麓のあたり一面に青色のアネモネが群生しているのが見えた。おまえと雪原の中で出会ったとき、ひらひらと揺れるおまえの青いスカーフが、私にはまるでハイルハン山の青いアネモネのように見えたものだった。思い返せば、ひと月前のことだった。今では羊の出産もすでに峠を過ぎ、早生まれの子羊は成長し、遅く妊

娠した母羊がときたま子羊を出産するくらいだった。私が子家畜の世話をするのも、今や単なる口実にすぎなくなった。おまえの傍にもっといたいというのが本音だ。私がそんなことを思ってやってくると、おまえは山麓の柳の木立の中に座って、

薄青く霞んで見えるよ、バヤン・ハイルハン山
群がって移動するよ、羊の群れ
豊かな白い羊群の傍に
幼い恋人のおまえがいる

と響き渡るような声で歌っていたものだ。そして、私はおまえが歌の上手なことを知り、おまえにこの歌を教えてもらったのだ。

私が膝上まで伸びたカモジ草とハヤガネ草の間で枯草を集めながら、一輪の青いアネモネを切り取って、おまえのおさげ髪に差してやると、私のことを可愛らしい表情で見て笑い、「あなたはこんな色が好きなのね」と甘えるように言った。「好きだよ」と答えた私は、さらに「青い色はいちばんきれいな色だよ。おまえのスカーフがちょうどこんな青い色をしている」とあわてて答えた。「それなら、あなたは青い色のスカーフを巻いた娘を愛しているんでしょう」と私を問い詰めた。「愛している」とか「思いを寄せている」とか、きっぱりと言ってしまいたかったが、「わたしには向こうで待っている人がいる。それに……」と思い、本当のことをおまえに告白したのだった。私の話をおまえは驚いて聞き、長く黒いまつ毛をしばたたかせて、感極まったような悲しい表情を浮かべたが、やがて穏やかな愛らしい声で、「それなら、昨晩のような淫らな行為を姉さんとしてはいけません」と注意した。そのときもまた私はおまえの手を握っていた。しかし、このことばを聞き、私の固く握った手は自然と緩んでいった。私はとても恥ずかしかったのだ……。

生まれた子羊も成長し、私が帰るときが近づいた。あなたがたが私と別れるのがつらいのは当然だ。「お兄さんを行かせない」と妹は駄々をこね、「あと何日間か伸ばしたらどうかね。何て急な話なのかね……」と前歯の欠けた母は嘆いた。みなさんががっかりするのも無理はない。私もみなさんの元にいたいと思う。こんなに温厚な方々と慣れ親しみ、いっしょにいられてよかった。

しかし、私は「人民公社の畜群を健康に育てて渡し、生まれた子家畜を集計して登録し、名実ともに人民公社の優秀な成員となる。『内モンゴル日報』やラジオで、第二のロンメイ（龍梅）やユイロン（玉榮）[2]として名をはせ、祖国のために尽力する。人民のために功績を上げる人物になる。私の父が誇らしげに私の額に接吻する。私の母が息子の安寧を祈りな

[2] 内モンゴルのモンゴル人姉妹。1963年の冬のある日に大嵐から国の羊を守ったため国民的な英雄になった。当時ロンメイは11歳、ユイロンは9歳だった。

がら乳を撒いて祝福する。生産大隊（ブリガード）の隊長が喜びながら私の手を固く握り、“英雄牧民”として褒賞する。とりわけ、私と婚約したオランホワルがこれを聞きながら感謝する……」想像して気があせり、「私たち二人は結婚してから本当の幸せを味わう」と将来について大層なことをかんがえ、別れる前におまえの手帳に、「革命的な姉アルタイマーへ。私個人と羊群を救ってくれたことに対して革命的なご挨拶を送りたい」と頭韻を踏んだ文を書き、故郷に帰ることとなった。おまえからの贈り物を受け取り、そこに書かれた文字を私が読めないのをおまえは知り、「このページに書いてあるのは記念のことばなのよ。それはあなたがいちばん好きな“おまえがいる”という歌です。このノートの間にアネモネの花が挿んであるわ。あなたが帰った後、悲しくなったら、それをいとおしんで接吻してね。お姉さんのことを忘れないでね。それは私のおさげ髪にあなたが差してくれたあのアネモネなのよ」とはっきり説明してくれた。彼女のおさげ髪から生えたような春の最初のアネモネを持って帰ることになったので、私は限りなく感動し、また悲しみも覚えるのだった。

国境の標柱のところに到着し、両国間で失われた家畜や車両を交換し受領するには、かなり面倒な手続きが必要だということに私は気づかなかった。おまえは私のことを見送りにきてくれた。私はわが方の車に乗り込む前に、だれにも邪魔されずに、おまえの手をいちばん最後と思って力いっぱい握った。鼻がむずむずして涙が流れた。おまえも青い絹のスカーフの端で涙をぬぐい取り残された。私の乗った車が遠ざかって行くと、おまえはスカーフを振り回しながら見送っていた。私はもう一度おまえの傍に行って、二言三言ことばを交わしたいと思ったが、再び国境を越えることはできるわけがなかった。おまえが振る青い絹のスカーフは、広大な蒼天の青色と混じり合い、私の心に永遠の青い揺らめきとして残った。

青い絹のスカーフは私の手のひらの上に、おまえの貴重な贈り物はその上に。私はおまえの故郷を眺めながら、黙って涙を流していた。陸続とした山々は絶えることがない。モンゴルの山は青、水も青、天空も青。無限に続く蒼天！

さて私は帰ってからどうなったか？“英雄牧民”にはなれなかった。「龍梅」にも「玉榮」にもなれなかった。生産大隊（ブリガード）の隊長は私を賞賛しなかった。それどころか、私は非難され、悪魔の境遇に転落した。あの妹が私に贈った写真機が大問題となり、人民公社に没収されてしまった。「帰ったら両親の写真を撮る、婚約者の写真を撮る、近所の人たちは私のことを写真機持ちの若造と騒ぎ立てることだろう」と思っていたこの代物が、すべての不幸の元となり、腕に赤い腕章を巻いた連中が「モンゴルのスパイ」「国家機密を盗む物的証拠」と、悪意をもって怒鳴り散らした。さらに、私のもらった白いノートと青いアネモネも、どんな罪があるのかわからなかったが、これらもまた没収された。

十八歳の男子たる私は、他人の土地にただ平穏に行ってきただけなのに、ほどなくして、背中に白い布を貼りつけられ、腰をかがめたまま、故郷の多くの人びとの間を引き回されるようになってしまった。いちばんひどいのは、「外国のスパイ」「国家反逆者」というレッテルによって、私に否定的な汚名が着せられたことである。これが原因で、婚約者のオランホワルとは反目しあうようになり、彼女は私を告発した側についた。彼女と結婚して幸せに暮らそうと思い、前もって建てておいた二部屋の土蔵造りの家も、羊の交尾のための施設として生産大隊（ブリガード）の所有するところとなった。こうして、嫁にもらおうとしたオランホワルもいなくなり、両親が建ててくれた二部屋の土蔵造りの家も失い、荒野に追放され、偉大な功績を上げたいという私の誠実な思いもはかなく消え、罪人となって投獄されることとなった。

男は成長してフェルトを伸ばすという。私は成長して一人前の男になった。地獄のような刑罰にも耐え忍び、何とか乗り越えた。人間は苦痛に耐えることのできる強靭な生き物だ。外国に迷い込んで戻ってくるなり、重く厳しい刑罰が待ち受けていた。そして悪臭のする湿った牢獄で十年間も過ごした。こうなることがあらかじめわかっていたなら、豊かな暮らしを営むあの姉さんの傍を離れることなどなかった。ああ、憐れむべきかな、わが十八歳よ。

私を無実の罪から解放し復権させてくれたのは、かなり遅く、一九七八年の春になってからのことだった。過ぎ去った十年間を追及しても仕方がない。国家の政策は信頼できるようになり、私は名誉を回復し、没収された家畜など全財産も正確な計算に基づき返却してくれた。足りないものは、おまえが私にくれた小さな白いノートとその中に挿み込んだ青いアネモネの二つだけだった。金銭も増額して支給してくれたが、貴重な宝物を失ってしまったので、それを取り戻したいという願望を強く抱くようになった。それは、おまえが私に語った二言を覚えていたなら、ノートを失っても平気だったが、それがない今は、一生の悲しみのように感じられたからだった。本当に悔やんでも悔やみきれない。

ところが、二十年にわたる最大の後悔が今日このように解消されるとは。それは、ソムの職員が休暇を取るために事務を委託するとき、書類保管箱の底から私のノートを見つけ、私に渡してくれたからだ。職員の老人は新文字が読めた。「心の中に秘め、心の中で接吻してください（*Sedkil-degen öbörlejü sanaγan-daγan ünüsčü yabuγarai*）。お姉さんより」という二言を、老人は私に読み聞かせてくれた。ああ、これでやっと気分が晴れた。ことばは二言だけだったが、頭韻を踏んだ「革命的な羊飼い」の空疎なことばに比べたら、はるかに素晴らしい魔法のようなことばだった。人生とはこうでなければならない。「私はおまえが好きだ（*Bi čimadaγan sayin siü*）」。これが私のたった一言の返事だ。おまえは覚えてくれたかな。青い山々がぼんやり見え、おまえははるか彼方にいる。ノートの隙間には、おまえのおさ

げ髪に差して遊んだあの春の青いアネモネがそのまま残されている。奇妙だが美しい記念の品だ。私はおまえに接吻しようと思って、寝るときには枕元に置いて匂いをかいだ。青い色が少しも色褪せず、清らかさも失わない、お気に入りのこのアネモネを、私は大切に保管している。この美しい花が、あの春のアネモネ、あの春のバヤン・ハイルハン山に最初に咲いたアネモネなのだ。

アルタイ、ハンガイ、ヒャンガン（興安嶺）の先祖伝来の美しい大地は、みなアネモネの咲き広がる肥沃な土地だ。今まさに青いアネモネが群生して咲き広がる時節が到来した。

羊の群れは穏やかに進み、家畜の柵のある高台にはアネモネが咲き乱れていた。私は今年の春の最初のアネモネを一輪切り取り、ノートの隙間に挿み込み、おまえのために買った青い絹のスカーフでしっかりと包み、懐に忍ばせた。心は晴れ、気分も安らいだ。これでアネモネの押し花は一対となった。ああ、おまえに会いたい！

遠くの山々が霞んで見える
広大な蒼天がどこまでも続く
薄青く霞んで見えるよ、バヤン・ハイルハン山
群がって移動するよ、羊の群れ
豊かな白い羊群の傍に
幼い恋人のおまえがいる

（解説）

U.セチンバートル（U. Sečenbaγatur）は1951年に内モンゴルのジョーオダ盟（現在の赤峰市）ヘシグテン旗のダルハン・ソム（Darqan sumu）のタブン・ウヘルト（Tabun Ükertü）という村で牧民オルトナソン（Urtu-nasun）とガルボ（Garbu）の2番目の息子として生まれた。奥さんの名前はオヨーンビリグ（Oyunbilig）。兄のチョグジルト（Čogjiltu）はシリーンゴル盟の歌劇団の団長で、中国の一級の作詞家・作曲家である。

セチンバートルは小学校4年生の時に母が心臓の病気にかかってしまったので、学校を辞めて、家に戻った。11歳からずっと家のしごとを手伝いながら、母の世話をした。叔父が知識人だったので、叔父に頼んで家で数学と文学を教わった。19歳の時に結婚して、23歳から村の学校で教師として務め始めた。1976年にジョーオダ盟のテレビ局の記者養成のクラスに参加した。それから、ルポルタージュを書くようになって、雑誌と本などに投

稿していた。1980年からダルハン・ソムの中学校の先生として勤務した。1982年から84年までの2年間はヘシグテン旗の教育研究所で働いた。90年代になってからダルハン・スムの総合学校の校長をつとめた。2000年に定年退職した。今は内モンゴル自治区民間作家協会員、内モンゴル作家協会員であり、ヘシグテン旗のロルガルジャブ（Rolgarjab）民間文化芸術協会会長もつとめる。

セチンバートルの代表作に短編集『山あいの春』『あの春のアネモネ』、口承文学のアンソロジー『ヘシグテン民間文学』がある。後者は、『内モンゴル民話集』（論創社、2012年）として日本語訳が刊行されている。

本作品「あの春のアネモネ」は同名の短編集（*Tere qabur-un iryui*, Qayilar: Öbör Mongyol-un Soyol-un Keblel-ün Qoriy-a, 2001）におさめられている。

『あの春のアネモネ』

『山あいの春』